

大聖堂のある街で

第6話 お母さんの恋人



堀田耕介

お母さんの恋人

ぼくはしんちゃんやりっちゃんと遊び、4時になると旧市街の修道院の向こう側の図書館へ行った。この街には大きな図書館が旧市街と新市街に一つずつある。新市街の図書館は市庁舎の近くのハマーシヨルド通りにあつて、大人の人たちが調べ物をしている。そこにもぼくの読みたい本はたくさんあるけど、ぼくは旧市街の図書館の方が好きだ。この図書館は古くて、昔の館のような空間に天井

までぎっしりと詰まった本棚が並んでいる。カスミとキスをしてから、ぼくはどうしてか妖精の話や不思議な世界の話が好きになって、ラジオは放りっぱなしにしていた。あれから3週間。なぜなのかわからないけど、ぼくはカスミに会う気がしなかった。しんちゃんたちと4時まで遊ぶと、家に戻って借りている本と鞆を持って旧市街の通りを歩いていく。新市街と違ってこちらの街は洒落てはいないけど活気がある。マーケットの中、色とりどりのパブリカや肉の焼ける匂い。キュウリやナス。市場の一角

を抜けると切妻屋根の古い修道院があつて、その横に大きな図書館がある。ぼんやりと明かりが灯る玄関を入つて眠そうな顔をしたおばさんに借りていた本を返し、カードを見せると席を指定してくれる。ぼくは席に鞆を置いて、二階の奥のファンタジーや民話の書棚に行き、そこで七冊本を出してきて自分の席で読み始める。7時の鐘が鳴るまで本を読んで、読みかけの本を借りて帰る。毎日同じことの繰り返しだ。

帰るとだいたいえっちゃんがいる。えっちゃんはシチューを作ったりスープを作ったりし、その間にお父さんが帰ってくる。えっちゃんが本を読んでいるぼくを呼びに来て、三人でご飯を食べる。おばあちゃんはこのごろ友達が出来て、前ほどえっちゃんに家にいろと言わなくなったのだそうだ。

「年よりは年よりの方が話が合うからな。」
とお父さんは言う。

「でも私にだったらああしろこうしろ言えるけど、おともだちはそういうわけには行かないから、それ

は不満みたいよ。」

とえっちゃんは言う。ぼくは黙ってスープを飲んで、

「ごちそうさま。」

と言って部屋に戻る。

「ユキのやつ、どうしたんだ？」

とお父さんがえっちゃんに聞く。えっちゃんは、

「さあ。」

と言って肩をすくめる。ぼくは本を読みながら、いつの間にか寝てしまう。夜中に目が覚めてトイレに行く、いつも必ずお父さんとかえっちゃんの話し声

がした。

カスミとキスをしてから、ぼくはお母さんのことを思い出すようになった。ぼくが3年生の冬、お母さんは寝込んでいた。

「どうしたの？」

って聞いてもさびしそうに笑って首を振るだけで、何も答えてくれなかった。雪が降って、街が銀世界になった日、学校から帰って来ると、お母さんのベッドは空になっていた。お父さんは、

「お母さんは病気を治すためにお母さんのお母さんのところへ行ったんだ。」
と言った。

「海辺の町のおばあちゃんのところ？ぼくお見舞いに行っていていい？」

お父さんは首を振った。

「危ない病気なんだ。ユキにもうつったら困る。病気が治ったら帰って来るから、待ってるんだ。」

それでぼくはさびしかったけど口には出さず、お母さんの帰りを待った。お母さん。帰って来なかつ

たらどうしよう。あれから一度だけ、お母さんから手紙が来た。少しずつ良くなっているから、そんなに遠くない時期に帰れると思う、と書いてあった。でもそれから、ぶつつりと手紙は来なくなった。それからお母さんのことをお父さんに聞いても、他のことならなんでも答えてくれるのに、お母さんのことだけは不機嫌な顔をして顔をそらすようになって。えっちゃんに聞いても、黙って首を振るだけだった。

いつかぼくは、お母さんのことは聞かないことに決

めた。お母さんのことは考えないようにしよう。ずっとそう思ってた。でも、カスミとキスをして、自分の中で何かを外れてしまった気がした。お母さんのことが気になって仕方なくなってきた。今まで考えないようにしていたのに。自分が、自分でなくなっていく気がして、恐かった。でも、我慢できなかつた。ぼくは思い切って、えっちゃんに聞いた。

えっちゃんはぽつりと答えた。

「お母さんには、恋人ができたのよ。」

「恋人？」

「恋人って知ってるでしょ。」

「知ってるよ。でも……」

「好きな人ができたから、お母さんはこの家を出て行ったの。」

「でも、おばあちゃんのところにいるって。それに手紙もおばあちゃんちから来てたし。」

えっちゃんは何で静かに微笑んで言った。

「好きな人ができたからと言って、その人のところに行ったわけじゃないの。その人は簡単に会える人

じゃないから。でもこの家にはいられなくなった。だからおばあさんのところへ行ったのよ。」

「病気じゃなかったの？」

「病気かもしれない、そうじゃなかったのかもしれない。」

「えっちゃん、ぼくに何か隠してる？」

えっちゃんは下を向いた。

「ごめんね、ユキちゃんに何もかも言うことはできないわ。それに私も、お母さんのことは知らないことがたくさんあって。何を話してよくて、何を話した

らいけないのか、わからない。」

そうはつきり言われると、それ以上何を聞いたらしいのかわからなかった。

「でも急に、どうしてお母さんのことを聞くの？今までずっと聞かなかったのに。」

「……」

えっちゃんはまだ下を向いて微笑んだ。

「そうよね。今まで聞かなかったことの方がおかしいんだわ。あたりまえのことよね、お母さんがどこに行ったか気になるなんて。」

「そうだよ。」

突然、ぼくは涙が出てきた。

「お母さん……」

涙が止まらなかつた。えっちゃんは優しくぼくの頭をなでた。

「男の子でしょ。泣いちゃだめだよ。」

ぼくにはそれが、思いつきり泣いていいよ、というふうに聞こえた。ぼくはいつまでも泣いて、えっちゃんはいつまでも頭をなでてくれた。

川のほとりで

妖精の本にも集中できなくなつて、ぼくは学校が
終わると、市庁舎にお父さんの仕事を見に行くよ
うになつた。修理は順調に進んで、正面の大きな
時計を残すだけになつた。何人もの職人がお父さ
んの指示で盤面を磨いていく。お父さんはチツクと
タツクみたいに盤面に開いた穴から中にもぐつて機
械を調整したり、針や盤面のチェックをしたりして
いた。ぼくは毎日お父さんの仕事を見ていた。少し

ずつ仕事が進んで行く。少しずつ時間が流れていく。時間とともに、時間が流れていく。ぼくの中の時計も、進んで行くんだと思った。でも、どこに進んでいるのか、わからない。

と、ぼくの肩に手を置く人がいた。ぼくはその匂いを知っていた。

「カスミちゃん」

振り返らないでぼくは言った。ぼくは目をつぶった。なぜだろう、涙が流れた。

ぼくたちは川のほとりの遊歩道を歩いた。カスミはコットンの黒いサマードレスを着ていた。

「どうしてたの？」

「うん」

「いそがしかったの？」

「そんなことない」

「新しいラジオを作ってたとか？」

「なんか最近放りっぱなし」

「本を読んでは？」

「えっちゃんに聞いた？」

「うん。よく図書館に行ってるって。」

「妖精の本を読んでたんだ。でも、最近何かそれも飽きちゃって。」

「何かあったの？」

「……」

答えられなかった。ぼくは立ち止ってしまった。

「ね、元気出して。」

カスミはぼくをのぞきこんだ。

「元気だよ、ぼくは。」

「うそばっかり。」

「元気だったら。」

「ユキちゃん。」

カスミはちよつと視線をそらした。真剣な目で視線をそらしているから、ぼくはどきつとした。

「どうして私と会ってくれないの？」

ぼくは下を向いた。

「私のこと、嫌いになった？」

ぼくは首を振った。

「あんなことして、嫌だったの？」

「そんなことないよ。とても」

「とても、何？」

「素敵だったよ、カスミちゃん」

ぼくはカスミを見た。

「でも、なんだかあの日から、ぼくはぼくでなくなつて行くような気がして。」

ぼくは下を向いて歩きだした。カスミはついて来る。

「なんか、落ち着かない。なんか、不安なんだ。」

「誰でもそうよ。」

カスミは言った。

「誰でも大人になって行くのは、不安なの。自分が自分でなくなっ行って行く気がするわ。」

「カスミちゃんも？」

「うん。」

ぼくは急に不安な理由が分かった気がした。

「そうなんだ。大人になるのが不安なんだ。」

ぼくは立ち止った。

「どうしたの、急に。」

「だって、ぼくが男の子らしくなったら、カスミちゃ

んはぼくのこと、好きじゃなくなるかもしれないでしょ。ぼくはどうしたらいいのかわからない。」

カスミは、不意をつかれたような顔をした。

「ごめんね。」

カスミもふつと横を向いて言った。

「私のこと、そう思ってくれてうれしいわ。私もずっと、あなたといたい。でも一年後のあなたがやっぱりあなたのままなのか、一年後の私がやっぱり私のままなのか、私にはわからないの。自分が自分でなくなっていく気がするってあなたが言うようにね。今

の私は、今のあなたが好きよ。それは確かなこと。でも今まで付き合った人とも、一年経ったら私は一年前の私じゃなくなっただし、一年前のその人でもなくなっただし。だからね、あなたとも今だけなんじやないかなって思っちゃって。」

ぼくは胸にきゅんと痛みに似たものを感じた。

「ぼくのこと、そんなふうに考えてたの。」

自分の声が震えているのに気がついて、ぼくは頭に血が上ってしまった。

「だって。」

ぼくは黙ってスタスタと歩きだした。カスミはついてこない。この気持ちはどうしたらいいのかわからない。空を見上げた。空は青い。こんな気分なのに、空はやけに明るい。ひばりが鳴いている。

「ユキちゃん。」

カスミが追いかけてきた。ぼくは黙って歩く。カスミも黙ってついて来る。ぼくは顔を上げて市庁舎の時計を見た。何かおかしい。市庁舎のあたりがざわざわしている。

「どうしたの？」

ぼくは駈け出した。

「どうしたの、ユキちゃん！」

「お父さんが！」

大聖堂のある街で 第6話 お母さんの恋人

<http://p.booklog.jp/book/45256>

著者：堀田耕介

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kous37/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45256>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/45256>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.